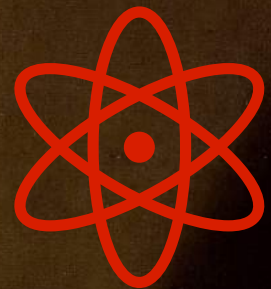




特別講義 英米の国民国家構築と  
フランクリン・イメージの変容



国際関係学部棟3階

3314講義室

2019年

12月12日(木)

14時40分から

金井光太郎氏

東京外国語大学

名誉教授

北アメリカに住む「イングリッシュ」との意識をもっていたフランクリンは、ジェントルマンの地位を認められ、イギリスに渡って活躍します。本人も文明世界での生活を楽しんでいました。しかし、18世紀後半のイギリスは大ブリテンの一体性の構築を推進し、アメリカを外化してゆきました。このうごきは、北アメリカにいたイギリス系に反発を呼び、伝統的な権利の確認を意識させます。

英米の抗争が深まる中でフランクリンは、帝国の融和に尽力しましたが、諦めざるをえなくなって戦争の直前に帰

国します。帰国後は独立を断固として主張し、支援を求める使節としてパリに派遣されました。パリでフランクリンの人気は高く、それを利用した彼の外交活動は多大な成果をあげたといえます。アンシアン・レジーム批判で盛りあがるサロンで、荒野から来た哲人として、素朴で個人の活躍する自由なアメリカを体現する存在を演じました。

建国期のアメリカ合衆国は、共和主義の伝統を受け継ぎ、無私の人オウシントンが代表的な人物となり、フランクリンはその活躍にもかかわらず、本国では評価が低く、不遇のうちに亡くなります。

死後の哀悼もフランスで啓蒙世界の偉人として表明されましたが、しかし、アメリカでは忘れられてゆきました。

19世紀に入り、アメリカ社会が資本主義的な発展を見せ、それが国家イメージとなるにつれてビジネスマンの典型としてフランクリンが思い出され、自伝がアメリカでもようやく出版されて人気を博してゆきます。